岡山大学大学院文化科学研究科紀要第12号（2001.11）

接続詞「それと」の機能

金　　善美

1．はじめに

並列表現には並立助詞「と、に、や…」や並列の接続詞などが用いられる。並列の接続詞には「それに、それから、そして、また、並びに…」が挙げられている。その中で「それから、それに」のような「それ」という指示成分を含んでいる接続詞は、指示詞「それ」＋助詞と同じ形態でもあり得る。本稿は並列表現として用いられる「それと」を取りあげ、接続詞としての働きを見ていくものであるが、従来、「それと」を接続詞と認定している文法書や論文などは見られない(注1)。しかし、次の例のような「それと」は明らかに接続詞として機能している。

(1) 野菜かごの中には、人参と、ジャガイモと玉葱、それと、ひからびた長葱が二、三本あった。（太）

この「それと」は指示詞「それ」＋助詞「と」ではなく、前件「人参とジャガイモと玉葱」と後件「長葱」を並列的につなぐ接続詞「それと」である。

以下では、接続詞「それと」としての認定、文法的な特徴や前件と後件の意味的な特徴などを考えていく。

2．指示詞「それ」＋助詞「と」と接続詞「それと」

以下で見るように、「それと」は形の上から指示詞「それ」＋助詞「と」に分析できる場合と、接続詞「それと」に認定できる場合がある。まず、指示詞「それ」＋助詞「と」として解釈できる例を見てみる。次の例は「それ」が先行名詞を承ける場合の例である。

(2) 私は十分な金を貯め、それと年金とをあわせてのんびりと暮し、ギリシャ語とチェロを習うのだ。（世）

(3) 私は自分で自分が耻ずかしい程、きょときょと周囲を見廻していました。不思議にもよく働らくのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなって来ました。（華）

(4) 「ご家族がいらっしゃるんですね」「いますよ。妻子がいるんですよ。それと、僕の母とが、折り合いが悪くてね。あんまり、両方で、我儘勝手を言うから、置いて逃げて来たんですよ」（太）

(2)・(3)は一文の中に用いられた場合であるが、(4)は文頭に位置する場合である。(2)・(3)はそれぞれ「金」、「頭と眼」というモノを指している。また、(4)は「妻子」というヒトを指している。「それ」は普通モノ・コトを指すと言われるが、話し手との人間関係によってヒトを指すこともある[注2]。

次は「それ」が先行する文脈を承ける場合である。

(5)　もし順調に発足すれば、関東と関西に広い敷地を借り、そこに工場を建てる予定だった。それと現実との落差があまりに大きく、整理しなければならない事務はたくさん残っている。（人）

(6)　「純子さんのお話では――いや竹野さんのお話では、会社の中で一度狙われたとか」「ええ。はっきりそうとは言えないんですけれど……。今度の殺人事件も、それと何か関係があるんでしょうか？」（女）

(5)・(6)の「それ」は先行名詞ではなく、先行文脈を承けている。(5)は「関東と関西に広い敷地を借り、そこに工場を建てる予定である」、(6)は「会社の中で一度狙われたことがある」という先行する文脈によって表された出来事全体を承けている。

これらが指示詞「それ」＋助詞「と」であることは述語との関係から明らかである。例えば(2)の「合わせる」は「AとB（と）を」、(3)・(4)の「反対に」・「折り合いが悪い」は「AとB（と）は／が」が成分として要求される。そして(5)の「落差」は「AとB（と）の」を、(6)の「関係がある」は「AとB（と）」を必要とする。このような名詞や述語は文法的、意味的な成分として「Aと」の「と」をとる。ここでは比較対象となる「Aと」の「A」に指示詞「それ」が用いられている。この「それ」が何を承けるかは具体的に先行する文脈から取り出すことができる。それが(2)～(4)は先行する名詞や名詞句、(5)・(6)は先行する文脈である。このように(2)～(6)が指示詞「それ」＋助詞「と」であると解釈できるのは、「それと」にかかる名詞や述語の意味に基づくことがわかる。

ところが、次のような例は上で見たような指示詞「それ」＋助詞「と」ではない。

(7)　しかし、他にも、正月や、お盆や、それと祭日にも養父は家に帰って来ない。（フ）

(8)　「初めは土地が安かったからさ。平地は高いからね。しかしこれはあんまり大きな声じゃ言えないけど、低い所にある大学は、どうもあまりよくならない」「心理学かね」「わからん。それと、緑のない大学もだめだね」（太）

(7)・(8)の述語「帰ってくる」・「だめだ」は「AとB（と）」の「と」という必須補語をとらない。この「それと」の「それ」は先行する名詞を承ける指示詞ではないし、「と」も比較対象を示す助詞ではない。即ち、この「それと」は一語として認定でき、しかも、(7)では名詞と名詞を、(8)では文と文をつないでいる。従って、接続詞であると認定できる。(7)は前件「正月、お盆」と後件「祭日」という名詞を、(8)では前件「低い所にある大学はあまりよくならない」と後件「緑のない

大学もだめだ」という文を並列的につなぐ接続詞である。

以上のように、指示詞「それ」＋助詞「と」に解釈できる「それと」もあるが、指示詞「それ」＋助詞「と」に解釈できない一品詞としての接続詞「それと」もある。現代日本語の中にはこのような接続詞としての「それと」が非常に多く見られる。

3．接続詞「それと」

以下では、接続詞「それと」に見られる文法的な特徴や前件と後件の意味的な関係などを見ていく。

3．1　接続詞「それと」の文法的な特徴

3．1．1　接続する項の文法的レベル

接続詞「それと」は語レベルや文レベルでの接続の用法がある(注3)。まず、語レベルでの接続を見てみる。

(9)　？はさみそれと糊を持って来てください。

(10)　《ねえ、ホテルっていうものは、いつも先にお金をとるの？》まだ小さかった太郎は訊いた。《人相、風ていの悪いの、それと荷物の少ないのからはね》（太）

(11)　妙覚寺本山を常宿にしたのは、この寺が京の中心部近くにある便利さと、それと、舅斎藤道三が少青年期をここで送ったというゆかりに懐しさを覚えたためであろう。（国）

これらは名詞や句接続の例であるが、二項目を対等に接続する場合である。(10)・(11)の句接続に比べて(9)のような名詞接続の例があまり見られないことに注目したい。(9)は前件「はさみ」の後にポーズを入れて「それと」を使うと、より安定感が感じられる。それはポーズを入れると、次の要素を探すような一種の検索機能が働くからである。「はさみ」の後にポーズを入れずに言う場合は(9)’のような並列助詞「と」が使われやすい。

(9)’はさみと糊を持って来てください。

(9)の名詞接続に比べると、(10)・(11)の句接続の方が「それと」が使われやすい。そして、(11)は「それと」の直前に並立助詞「と」を伴っていることから、(10)より安定している。(9)も次のように「それと」の直前に並立助詞「と」をつけると自然な表現となる。

(9)’’はさみと、それと糊を持って来てください。

次の(12)・(13)も「それと」の前に単数の項目が提示されている例である。しかし、(9)～(11)とは異なって、先行する文の中に接続する項目の数を示す「二つの～」が現れている。

(12)　私の中にふたつの心がありました。やはりあぶくみたいに湧いて来る嫉妬、それと安堵でした。（錦）

(13)　この隊は二つの任務をもっている。信長が万一、道三救援のために北上してきたばあい、それをふせぐ役目、それと道三が美濃をぬけ出て尾張に走る場合、取りこぼさぬように網を張っておく役目、このふたつである。(国)

(9)と(12)はともに二項目の名詞接続であるが、(9)より(12)の方に安定感を感じるのは、先行する文に「二つの～」が提示されているからであろう。

次は「それと」の前件に複数の項目が取りあげられ、後件に単数の項目が取りあげられている例である。

(14)　しかし、他にも、正月や、お盆や、それと祭日にも養父は家に帰って来ない。(フ)

(15)　新妻「最近は広角が多くなりましたね。それもいちばんスタンダードな35ミリ。もし、何か好きなレンズが一本で写真を撮れと言われたら、僕は35ミリで撮りますね。その次が24ミリ、28ミリの広角、それと50ミリの標準を使う頻度が高いですね。〈後略〉」(僕)

(16)　野菜かごの中には、人参と、ジャガイモと玉葱、それと、ひからびた長葱が二、三本あった。(太)

例(9)のように前件に単数の項目が来るときに比べて(14)～(16)のように前件に複数の項目が来る場合、「それと」に安定感が感じられる。三つ以上のものを接続する場合は接続詞「それと」の他に、並立助詞「と、や」や空結合子(「、」のようなもの)を用いることができる[注4]。「A、B、それとC」のように前件に複数の項目が提示され、前件と並列するものを後件につなぐときには、接続詞「それと」が用いられる。

以上のように、語接続の場合は二項目を接続するより、三つの項目を接続するのが一般的であることがわかる。

次は文レベルでの接続であるが、(17)は二文の接続の例である。

(17)　矢崎「向田さんが黒猫にこだわるっていうのは、何か理由があるんですか？」向田「私、当時クロちゃんというあだ名で呼ばれておりまして。」矢崎「黒かったんですか？」向田「いえ。まあ色も黒かったんですよ。というのは、冬はスキーをしておりまして、夏は泳いでヨットに乗ってましたから、白くなるのは一年に一、二カ月しかないんですね。それと、お金がなかったもんですから、着てるものがほとんど黒だったんです。今も黒を着ておりますけど、これは洗濯を怠けるという簡単な理由なんです。当時顔も黒かったうえに、黒い服着てまして、あだ名がクロちゃんていわれてたんです。〈後略〉」(向)

この「それと」は「クロちゃんというあだ名で呼ばれていた」理由として前件「色が黒かったのです」と後件「着ているものがほとんど黒だったのです」を対等につないでいる。(17)の「それと」は先行する文と後続する文を並列的につなぐことができる。文接続の場合は(17)のように二文を接続する例が圧倒的に多く見られる。

次(18)は三つ以上の文を接続する例である。

⑱ 小泉「エート、それから、きょうは世界で一番臭い中国のお酒も持ってきたので、あとでぜひ。この酒はすごいんです。匂いを計る機械があるんですが、そのメーターが振り切れちゃう。それからこれは、酔っ払う前に差しあげときたいんですが、僕が書いた本全部持ってきたんです。〈中略（しばらく本の内容を話す）〉それからですね、これ珍しいでしょう。鯨の缶詰。須（ママ）の子の缶詰。あとでこれも食べましょう。それとですね……。」東海林「少し話を整理しましょう（笑）。」（ず）

これは同一話者の例であり、「世界で一番臭い中国のお酒も持ってきた」、「僕が書いた本を全部持ってきた」、「鯨の缶詰と須の子の缶詰を持ってきた」という三つの文を「それから」でつないでいる。「それと」で三つ以上の文をつなぐ場合は、「それと」の前に二文を提示して、後に「それと」をもって一文をつなぐようになる。「それと」の前の二文は「それと」に類似する他の接続詞でつなぐ。従って、⑱では「それと」とともに類似の接続詞「それから」が用いられている。

このように、文接続の場合は三つ以上の文を接続するより、二文を接続するのが一般的であることがわかる。これが語接続とは大きく異なる点である。

3．1．2　「それと」の位置関係

ここでは接続詞「それと」が、取りあげられる項目間のどの位置に用いられるのかを見てみる。

⑲ しかし、他にも、正月や、お盆や、それと祭日にも養父は家に帰って来ない。（フ）

⑳ 野菜かごの中には、人参と、ジャガイモと玉葱、それと、ひからびた長葱が二、三本あった。（太）

これらは語接続の例であるが、「A、B、それとC」のように列挙する最後の項目の直前に「それと」が用いられている。しかし、次の（21）は「それと」の後に複数の項目が提示されている例である。

㉑ 「白金の迎賓館て知ってる？」「うん。でもどうして？」「いい所？」「悪くはないと思うけど」「そこでさ、今度うちの十五周年のパーティーをやるんだよ」「金子ジムの？」「そうなんだ。それとエディさんのボクシング生活五十周年、村田英次郎の東洋タイトル獲得、内藤の移籍発表。四つをこみでやるのさ」（一）

㉑は「白金の迎賓館でパーティーを開く」という共通性はあるが、「それと」の前件と後件はそれぞれ異なった性質を持っていると言える。即ち、前件「十五周年のパーティー」は「金子ジム」という組織のことであり、後件「エディさんのボクシング生活五十周年、村田英次郎の東洋タイトル獲得、内藤の移籍発表」は「金子ジムに所属している選手個人」のことである。よって、後件に挙げられた三つの項目は、大きく「金子ジムに所属している選手個人」という一つの項目でくくることができる。このことからもやはり「それと」は最後の項目の直前に用いられることがわかる。

このように「それと」が最後の項目を提示するときに用いられる接続詞であるからこそ、次のよ

うに「それと」に「もう一つ」という成分が付加されることができる。

(22)　「辰君に教えてあげる。その作品が、いいか悪いかを決めるのは簡単なんだよ。小説でも和歌でも、作者名を消してみればいいんだ。それで読んでみて、いいものはいい、悪いものは悪い。一人の作者でも、いい作品はいい、悪いものは悪い。総なめに、いいとか悪いとか、決めることはないさ。それともう一つ、決定的な批評というのはない。自分の眼も、批評家の眼も、共に絶対に正しいと思うべからず」(太)

(23)　矢口「内の社のテレビのCFのディレクターが『あ・うん』を見て、月曜日の朝に私にいろいろ話すんですが、職業柄ちょっと違った視点から見ていて、それがおもしろかったんだけれど、最後に「すごい！だけど怖い」。(笑)」向田「そうですかねえ……？どうしてなんでしょうね……。」矢口「いや、男はね、あれは怖いんです。」向田「私なりにそのことを考えますとね、いつ、あの均衡が破れるのかなあという気持ちをもってくださるからじゃないでしょうか。破れないほうがいいという気持ちと、破らせてやりたいという気持ちが、見る人の中では五分五分に働いているんじゃないでしょうか。」矢口「そうですね。それともう一つは、向田さんの女性特有の眼が、男にとっては、唸ったり、おっかなくなったりするところで……」(向)

これは文接続であり、(22)は同一話者による例で、(23)は話者交替が行われる例である。(22)は話し手が「その作品がいいか悪いかを決める方法」を話す場面であり、方法の一つ目を提示してからもう一つを追加して述べようとするときに「それと」が用いられている。(23)は矢口が向田の意見に対して同意を示してから、その他にももう一つ理由があることを述べようとしていて「それと」を挟んで自分の意見を話している。

このように「それと」に「もう一つ」が付加されることによって、より一層後件に最後の項目が取りあげられることがわかる。このように接続詞「それと」に他の成分が付加されても「それと」の用法には影響がない。

次は「それと」とともに類似の接続詞「それから」が用いられている例である。

(24)　小泉「エート、それから、きょうは世界で一番臭い中国のお酒も持ってきたので、あとでぜひ。この酒はすごいんです。匂いを計る機械があるんですが、そのメーターが振り切れちゃう。それからこれは、酔っ払う前に差しあげときたいんですが、僕が書いた本全部持ってきたんです。〈中略（しばらく本の内容を話す）〉それからですね、これ珍しいでしょう。鯨の缶詰。須(ママ)の子の缶詰。あとでこれも食べましょう。それとですね……。」東海林「少し話を整理しましょう（笑）。」(ず)

(24)に見られるように、「それから」は「～、それから～、それから～、…」のように何回も繰りかえし使われて列挙する項目を延々とつなぐことができる。しかし、「それと」は「それから」のように何回も繰りかえし使われることはできず、「～、～、それと～」のように最後の項目を言う

ときにしか用いられない。

以上のことから、「それと」は列挙する最後の項目の直前に用いられ、提示される項目が最後であることを示す働きをする。

3．2　前件と後件の意味的条件

飛田・浅田（1995）では、「それと」の意味について“後から付け加える様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。”とする[注5]。この指摘のように「それと」は前件に後件を付け加えるときに用いられるが、どのようなものを付け加えるのかはっきりしない。そこで、ここでは前件と後件に意味的にどのようなものが来るのかを見てみる。

(25)　野菜かごの中には、人参と、ジャガイモと玉葱、それと、ひからびた長葱が二、三本あった。（太）

これは名詞同士を接続しているもので、取りあげられたものには「野菜かごの中にあるもの」という共通性がある。この「それと」はモノ同士をつないでいる。

(26)　「何で来たの？」おやじの、名古屋通いが始まることはわかっていたが、おふくろまで来たのは意外だった。「北川から、PTAの会があるっていうから来たの。それと、例のアパート屋から内装変更についての最終的なうち合せをしたいって言って来たから」（太）

(26)は「何で来たの」という質問に対する理由の説明として、前件「PTAの会がある」と後件「例のアパート屋から内装変更についての最終的なうち合せをしたいと言って来た」という二つの理由を取りあげている。前件と後件の事柄には何の関連性もないように見えるが、話し手の中では質問に対する理由という共通性が認められて「それと」で結びつけている。

(27)　「ねえ、ねえ、おやじさん、どうして大学って丘の上にあるんだろうね」「初めは土地が安かったからさ。平地は高いからね。しかしこれはあんまり大きな声じゃ言えないけど、低い所にある大学は、どうもあまりよくならない」「心理学かね」「わからん。それと、緑のない大学もだめだね」「どう、だめなの？」「学生がすぐ、ケンカするんだ。〈後略〉」（太）

(27)の前件「低い所にある大学」と後件「緑のない大学」には「だめな大学」という否定的な評価の共通性が認められる。

(28)　「このタイルの色、水色と小豆色と黒と緑でしょう、僕、困るんだよ。それと、ガラス窓。曇りガラスに桜の花びらが散ってる。このアパート、死にもの狂いで、南欧風に見せかけてるんだよ、外観は」（太）

(28)の前件と後件は「困るもの」でくくることができる。前件に「困るもの」が来て後件に「困らないもの」が来ることはできない。即ち、前件の事柄がマイナスなら後件にも必ずマイナスの事柄が来なければならない。

これらは「それと」を挟んだ前件と後件の共通性が文脈だけで十分判断できる例であるが、次は

場面の移動を伴った例であり、「それと」が用いられた発話場面だけでは共通性を見出すことは難しい。

(29) 藤原夫人は、ちょっと眉をひそめてみせると、「さ、どうぞ」と彼らを食堂から家の中に上げようとした。驚いたことに、藤原の家は、靴のまま上るのだった。思わず、太郎はためらった。〈中略〉「学校で、園芸クラブ入ってたっけ？」太郎は尋ねた。「あんなもの」藤原は少し笑いながら言った。「僕はもう少し、クロウトだから」その日、太郎は五月さんとクレッソンを半分ずつ分けた。そして夕飯の時間にすべりこみで家に帰りつくと、さっそくそれでサラダを作った。「ねえねえ、お母さん。僕はクロウトだ、って言った時の藤原の目付ってよかったよ。だけど、あいつ、かわいそうになあ。いつも、クレッソンなんかのことで、おふくろに絞られてるらしいんだ」太郎はこの夜、夕食の時、母に言った。「それとね、僕、今日、初めて上流階級と中流階級の区別わかったな」「どういうふうに違うのかね」「上流はね、必ず、靴のまま家の中に上るの、靴脱いで上るうちはね、どんなに豪邸でも中流」(太)

(29)で述べられたもの同士の事柄は相互に密接な関係がないように見える。ところが、話し手は前件「藤原がクレッソンのことでお母さんに絞られている」と後件「上流階級と中流階級の区別わかった」に「藤原君の家で感じたこと」という共通性を認めてそれを「それと」で結びつけている。

次は発話の状況まで読まないと、共通性を見出すことが難しい例である。

(30) 法廷帰りの圭一が入ってくる。圭一「ただいま。」孝子「五十嵐先生、これ……。」と、書籍大の宅配便を渡す。圭一、！　――差し出し人、□□映像処理センター。孝子「それと、辻谷さんがずっとお待ちです。」圭一「え？」(砂)

(30)の前件はモノを渡す行為であるが、後件は用件を言う発話行為である。前件と後件が分離的であって談話における独立性も高いが、孝子が圭一を待っていた状況を視野に入れると共通性が見出される。話し手の認識の中では「聞き手に対する用件」という共通性を持っていることから「それと」で結びつけている。

次は「それと」を挟んで話者交替が行われる対話の例である。

(31) 小田島「そのとおりだと思います。喜劇っていえば、三田佳子さんなんてのも喜劇やってほしいな。」向田「私も三田さん好きですね。日本ではもっとスターがちゃんと評価されていいんですよ。いしだあゆみって人もコメディの素質ありますね」小田島「十朱幸代なんかもね。」向田「それと渡辺美佐子さん。」小田島「いいですね、とても。」(向)

これは「喜劇に素質のある女優さん」という話の中で、「それと」が対話の冒頭に使われて聞き手の発話に対して話し手が同意を示しながら、その他に同類・同要素の項目を付け加えている。

(32) 「真面目にやっとるか？」父が苦虫をかみ潰したような顔で、コーヒーを飲みながら言った。「真面目にやるも何も、お茶出しとコピーだけよ、仕事なんて」「それとおしゃべりだろ

う」（女）

これは娘のことをよく知っている父が娘の発話だけでは不足しているという判断から後件を付け加える例である。聞き手は発話の中で「お茶出しとコピーだけ」とはっきり断定しているが、話し手から「それと～」で付け加えられることによって、聞き手が網羅できなかった情報があるという談話上の効果が生まれる。前件と後件の項目はマイナスのイメージがある。

このように話者交替が行われる場合も前件と後件には意味的に同じ（プラス＋「それと」＋プラス、マイナス＋「それと」＋マイナス）事柄がこなければならない。

ところで、次のように前件と後件の間に時間の差が強く感じられる場合は非文となる。

(33) ＃Ａ大の文学部を卒業しました。それと、出版社に入りました。

以上、「それと」の前件と後件の意味的な特徴を見てきたが、前件と後件には意味的な共通性が認められる。その前件と後件にはモノ・コトや事柄だけではなく、主張や判断レベルでの共通性も見られる。即ち、前件と後件は内容的に同質でなければならない。このような意味的条件は従来から指摘されている並列の接続詞に共通するものである。従って、「それと」は並列の接続詞の一つであると言える。

３．３　前件と後件の構文的条件

接続詞「それと」の前件と後件には意味的な共通性があるということがわかったが、ここでは前件と後件の文型の特徴について見てみる。

原則的に「それと」の前件と後件には同じ文型がこなければならない。

(34) 「〈前略〉それが治りかけて、最初に結婚した前の女房と別れた後、二つ決心したんです。退院したときには。ひとつは、もし初恋の女がオーケーするなら女房にしたいということ。それともの書きになるということ。〈後略〉」（お）

(35) 机の上にはさみがあります。それと、引出しの中に糊があります。

このように「それと」の前件と後件にはまったく同じ文型（例えば、(34)の「～ということ」）がくる。次のように前件と後件が同じ働きかけの文の場合にも自然な表現である。

(36) 鏡「外に車用意しろ！車だ！」青島「（外に）車ですって！」鏡「それと、クスリ持って来い」青島「それはちょっと」（踊）

(37) カボチャの横ばらは四角に切りぬかれた。「こっちは、まるまどといたしましょう。少々むずかしいな。手塩ざらもってきて、大吉、型をとるから。それとお盆もな。わた出すから。」（二）

(38) パンを買って来てください。それと、牛乳も買って来てください。

これらは話し手の願いや期待、命令などを相手に伝えてその実行を要求する働きかけの例である。前件と後件に、命令（例(36)・(3)）、依頼（例(38)）のような相手に働きかける表現がくる場合は

「それと」でつなぐことができる。このように前件と後件の文型が同じである場合は「それと」と共起できる。

(39) 野沢「ヒマラヤ行った人間に聞いたんだけど、七〇〇〇メートル級っていうと、すごく山がデカいんだってさ、やっぱりそれを一回見たいね。それと日本の冬の山。雪がかぶってきれいな山ね。」(僕)

これは話し手の願望を表す文であって、後件には前件の述語と同じ「見たい」という願望の表現が省略されている。例(38)が次の(38)'のようになるのも「買って来てください」という述語が同じだからである。

(38)' パンを買って来てください。それと、牛乳も…。

しかし、次のように前件と後件に同じ問いかけの文が来るときは制限があるように見える。

(40) 夏休みに北海道に行くんですよね。それと沖縄にも行くんでしたっけ？

前件と後件は同じ確認要求の文である。話し手は、聞き手が「夏休みに北海道と沖縄に行く」ことを知っていて、その事実を聞き手に確認する例である。これは「夏休みに行くところ」という共通点でくくられて「それと」は自然な表現となる。

ところが、次のような例になると「それと」との許容度が低くなる場合もあり、非文となる場合もある。

(41) ＃A「夏休みにどこか行きたいな。」B「北海道に行きますか？それと沖縄にも行きますか？」

(42) ？？A「明日岡山に行くことになりました。」B「後楽園に行きますか？それと岡山城にも行きますか？」

(41)は聞き手の「夏休みにどこかに行きたい」という発話を聞いて、話し手が日本の地名の中から「北海道」と「沖縄」を取りあげている例である。前件と後件に疑問文がくるときは、前件と後件とを選択的に並べ立てるように解釈されやすいことから「それと」は共起しにくい。そして、前件と後件の間に何らかの意味的な共通点が見られないことからも「それと」とは共起できないようである。(42)は(40)よりは「それと」との許容度が低くなるが、(41)よりは座りがいいと思われる。それは「岡山の観光名所」でくくられるという解釈ができるからであろう。

しかし、次のような例では前件と後件の文型は異なっているが、「それと」と共起できるようになる。

(43) 綾子「フフ、今日はもう授業ないんですか？」実「ないようなもんよ」綾子「映画の前売、買ったんです、二枚」実「映画？」綾子「それと、よかったら、うちの叔父が、赤坂でやってるシャツのお店で、シャツ一枚プレゼントしようかと思って」実「――」(林)

(43)の前件と後件は文型が異なっているように見えるが、聞き手に行動をともにしてほしいという依頼の内容は同じである。前件と後件はともに間接的な依頼表現であると解釈できることから「そ

れと」と共起できる。

(44) ニキビ肌にカバーマークどうですか？それと香川の取扱店教えてください。

前件は疑問文で、後件は働きかけの依頼文である。前件と後件の文型の隔たりが大きくないことから、前件と後件ともに聞き手に情報の要求を働きかけるという解釈ができる。前件と後件は意味的に「教えてほしいこと」という共通点でくくることができて「それと」と共起できる。

(45) 「これから果物屋さんに行くけど、何か欲しい物でもありますか？」「スイカがいいです。それとモモも買って来てください。」

後件は前件と異なる働きかけの依頼文であるが、「それと」と共起できると思われる。前件は情報の提供であるが、後件は行為の要求であるという違いはあるが、文脈に支えられて「買って来てほしいもの」でくくることができて「それと」と共起できる。

前件と後件に異なった文型が来ているにもかかわらず、「それと」と共起できるのは、話し手の表現意図と深く関わっていると思われる。文型が異なっても表現意図が同じであれば、意味的な共通性が認められて「それと」と共起できるようになる。

原則的に前件と後件が同じ文型である場合は「それと」と共起できる。但し、疑問文の場合には「それと」と共起しにくくなる。前件と後件に異なる文型は来にくいが、語用論的な支えによって意味的な共通性が認められると「それと」と共起できるようになる。

3．4　接続詞「それと」の単独用法

接続詞「それと」が単独に用いられる場合である。

(46) 小泉「エート、それから、きょうは世界で一番臭い中国のお酒も持ってきたので、あとでぜひ。この酒はすごいんです。匂いを計る機械があるんですが、そのメーターが振り切れちゃう。〈中略〉あ、ぼくは落款も彫るんですよ。この全部の木に押してあります。ぼくの落款は魚のアラなんです。ホラ、これがそうなんです。ぼくの本はほとんど臭いものの話なんですが、このような『灰の文化誌』なんていう本も書いてんです。灰なんてみんなふだん忘れて暮らしているが最後はみんな灰になるって（笑）、そんなことが書いてあるんです。それからですね、これ珍しいでしょう。鯨の缶詰。須（ママ）の子の缶詰。あとでこれも食べましょう。それとですね……。」東海林「少し話を整理しましょう（笑）。」（ず）

「それと」で言葉を切ってしまった場合、聞き手に対して後件にも発話が続くことを示す談話マーカーとして働く。そして、この「それと」は「N_1、N_2、…それとN_X」の中の「N_X」の発話内容がすぐ思い出せない場合に記憶検索とともに並行的に用いられる。即ち、次の要素を探す時に用いられるつなぎ言葉としての働きをしていると言える[注6]。

(47) ［AさんとBさんはプロ野球の話をしている］

A：「読売巨人って好き？」B：「それは、もちろんです。」A：「誰が好き？」B：「松井

と高橋と…」A：「それと？（↗）」

これは作例ではあるが、「それと」は聞き手に「付け加えなさい」という意味を持った促しの「それと」である。この場合「それと」は上昇調のイントネーションで発せられ、次の発話を要求している。即ち、「N_1、N_2、…それとN_X」という用法が対他的に拡張されたもので、聞き手が「N_1、N_2、…」と述べ、話し手が「それと？（↗）」と、聞き手に問いかける（N_Xを要求する）ことで[注7]、結果として促しの意味になるのである[注8]。

4．まとめ

以上の内容をまとめると、次のようになる[注9]。

- 「それと」は接続詞として認定できる。
- 「それと」は一般的に語接続では三つの項目を、文接続では二つの項目を接続するときに用いられる傾向がある。
- 「それと」は並列している項目の最後の直前に用いられる。
- 「それと」は共通のカテゴリーに属する同類の集合体を並列的に結びつける機能を持っている。
- 「それと」はつなぎことばや促しの働きを持つ場合がある。

今回は並列の接続詞「それと」の機能について見てみたが、類義表現と異なる「それと」のみの特徴を明らかにするには至らなかった。「それに、それから、そして、その上…」のような類義表現との共通点や相違点を明らかにしたい。今後の課題である。

【注】

(1) 但し、『日本国語大辞典』及び『日本国語大辞典第二版』には、「それと」を接続詞として認定して次のような意味記述と例を挙げている。

前の事柄に後の事柄が添加される関係にあることを示す。それに加えて、その上

多情仏心〈里見弴〉初雪の夜・一三「それは『娘』とよりは『女』と呼びたかった。

それと『大人しやか』と云ふ印象を、最初の一瞥が運び込んできた」

(2) 例(4)は自分の妻子だから「それ」をもって指すことができるが、次のように話し手より上位者や目上の人にはできない。

- ？？「わが社には女社長が一人居るけど、それと私とは仲が悪くてね…」

なお、出典を明記していない例は執筆者による作例である。

(3) 同じグループに入る接続詞の中で、語レベルでの接続が可能なものは「それから、それに、そして、並びに、また」があり、文レベルでの接続が可能なものは「それから、それに、そして、その上、また」があ

る。語や文レベルでの接続が可能なものは「それと」の他に「それから、それに、そして、また」がある。

(4) 空結合子という用語は、小野原生子（1982）による。切れ目を示す「、」のような読点のことを指す。

(5) 飛田・浅田（1995）での副詞は、学校文法でいう副詞の他に連語や接続詞なども含む広い意味で使われている。

(6) つなぎことばとしての働きは「それから」にも見られる特徴であるが、「それに」には見られない。それは「それに」は既に考えていたことを述べるときに用いられる接続詞だからである。

(7) これは「N_1、N_2、…それと N_x」という用法を前提としている。

(8) このように聞き手に発話を続けるように促す談話マーカーの機能は「それと」に類似する「それから」にも見られる。「それに」も対話の冒頭に用いられるが、聞き手に対する促しの用法ではなく、問い返しの用法がある。しかし、同じグループに入る「そして、そのうえ、また、並び」は対話の冒頭に現れにくいことから、聞き手に発話の続きを促すことはできない。

(9) まとめの内容は「それと」に見られる特徴であるが、中には「それと」に類似する並列の接続詞と共通するものもある。

【参考文献】

青木伶子（1973）「接続詞および接続詞的語彙一覧」『品詞別　日本文法講座6　接続詞・感動詞』明治書院

小野原生子（1982）「語の接続－何によって並列表現となるか－」『東京女子大学日本文学』58

飛田良文・浅田秀子（1995）『現代副詞用語辞典』東京堂出版

『日本国語大辞典　第二版』（2001）　小学館

【使用テキスト】

沢木耕太郎（1981）『一瞬の夏』（一）、赤川次郎（1984）『女社長に乾杯』（女）、宮本輝（1985）『錦繡』（錦）、司馬遼太郎（1966）『国盗り物語』（国）、星真一（1967）『人民は弱し官吏は強し』（人）、村上春樹（1985）『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（世）、曽野綾子（1979）『太郎物語』（太）、壷井栄（1952）『二十四の瞳』（二）、有吉佐和子（1970）『華岡青洲の妻』（華）－以上新潮文庫　CD-ROM版

内田春菊（1996）『ファザーファッカー』文春文庫（フ）

〈対談集〉

田辺聖子（1992）『おせいカモカの対談集』新潮社（お）、東海林さだお（2000）『ずいぶんなおねだり』文芸春秋（ず）、沢野ひとし（1998）『僕はやっぱり山と人が好き』角川文庫（僕）、向田邦子（1985）『向田邦子全対談』文春文庫（向）、田辺聖子（1986）『おセイさんのほろ酔い対談』講談社文庫（酔）

〈シナリオ〉

君塚良一（1998）『踊る大捜査線』映人社（踊）、山田太一（1983）『ふぞろいの林檎たち』大和書房（林）

伴一彦ホームページ（http : //www.plala.or.jp/ban/script.html）公開シナリオ

伴一彦（1999）『砂の上の恋人達』（砂）